

氏名： 牛江 ゆき子 (USHIE Yukiko)
所属： 人間文化創成科学研究科文化科学系 グローバル教育センター
職名： 教授
学位： 修士 (文学)
専門分野： 英語学
E-mail： ushie@fs.u-bunkyo.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

語用論 / ポライトネス / 字幕翻訳 / 英語教育 / 自律学習
pragmatics / politeness / subtitle translation / TEFL / autonomous learning

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・牛江ゆき子 西尾道子「英語映画の日本語字幕に見られるポライトネス」『翻訳研究への招待 3』日本通訳学会 翻訳研究分科会編 pp.65-84. 2009年2月
- ・牛江ゆき子 西尾道子「自律型語学学習用教材の整備とデータベース化について」『大学における自律学習型語学学習環境の構築』(平成18年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 牛江ゆき子) 研究成果報告書) pp. 127-141. 2008年5月
- ・牛江ゆき子 松藤薫子 絹谷弘子 中川千帆「学習者の個人差要因について—学生アンケート結果より—」『大学における自律学習型語学学習環境の構築』(平成18年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 牛江ゆき子) 研究成果報告書) pp. 81 - 126. 2008年5月
- ・松藤薫子 絹谷弘子 牛江ゆき子 エドワード・シェイファー「2007年度自習実践報告—データベースの協同作成を取り入れた自習指導—」『大学における自律学習型語学学習環境の構築』(平成18年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 牛江ゆき子) 研究成果報告書) pp. 61-73. 2008年5月
- ・牛江ゆき子「自律型語学学習の支援と環境整備の効果と今後の課題」『大学における自律学習型語学学習環境の構築』(平成18年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 牛江ゆき子) 研究成果報告書) pp. 142 - 146. 2008年5月

◆研究内容 / Research Pursuits

一つの画面に表示できる文字数が限られているため、字幕では、元の発話に盛り込まれている文の構成要素のうち省略可能な要素が省略されたり、表現が言い換えられたりすることが多い。牛江・西尾(2009)では、英語映画の日本語字幕を対象とし、英語映画の台詞の原文でポライトネス(Brown and Levinson(1987)の枠組みによる)をあらわす表現が日本語字幕においてどのように表現されているのかを研究した。原文のポライトネスをあらわす表現と、字幕のポライトネスをあらわす表現がNida(1964)の言うところのdynamic equivalence(受け手への効果という内容上の等価性)を持っているのか、また、どのような原則で原文のポライトネスをあらわす表現が字幕で表現されているのかを考察した。

牛江他(2008)は、自律的な語学学習環境の構築をめざした共同研究による各種調査、自習教材のデータベース作成とその効果などをまとめたものである。

Ushie and Nishio (2009) studied politeness in Japanese subtitles of English movies. Translated movie subtitles must be concise while retaining the original meaning, because they vanish as soon as lines are delivered by the actors. Because of that time limitation, expressions that are not directly related to the propositional meaning of the original, such as politeness, may be changed in the subtitles. Ushie and Nishio explored, based on the framework of Brown and Levinson (1987), 1) whether or not the politeness expressions in the original are retained as they are in the subtitles and 2) if changes are made, how they are changed. We argued that politeness expressions in the original lines in English reflect the impositions of individual utterances, but that those in the Japanese subtitles tend to reflect interpersonal distance or power relations between the speaker and the addressee. We also briefly discussed the role of ellipsis in the Japanese subtitles.

Ushie et al. (2008), in an attempt to promote autonomous language study, made a database for students to enable them to choose appropriate learning materials and studied its effects.

◆教育内容 / Educational Pursuits

本学の英語教育では、英語で知的にコミュニケーションが取れる国際人の育成をめざし、英語の文章の構造や論理の展開の仕方を理解させ、論理的な思考力を身につけさせることを重視している。したがって、担当する基礎英語・中級英語の授業では、英語の論理的な文章を読んだり、レクチャーを聞いたりして、論点と、論点がどのようにサポートされているかを把握する訓練を行った。また、授業時間は限られているため、課題として、読書レポートや、トランスクリプション（書き取り）、自分でリスニング等の課題を選んで学習する自由選択課題等を課し、英語力を高められるようにした。

専門科目「英文法」では、英語の文法の基本的概念の体系的な理解と論理的な文章の正確な読む力の養成をめざして授業を行った。「英語学概論」では、ポライトネスと指示表現の用法について基本的な文献を読んだ。「対照表現学Ⅰ」では、英語で意見を述べる文章の書き方を教えた。

Core English classes at Ochanomizu University aim to develop students' skills in communicating in English by developing both English skills, and logical and critical thinking skills. Therefore, in Basic English and Intermediate English classes, focus was on improving skills in comprehending expository reading and listening materials. Students were taught the logical organization of English paragraphs and essays and how they differ from those in Japanese. They were trained to grasp the main points of expository essays and lectures and to understand how these main points are supported. Students were also given various assignments (transcription, reading report, etc.) to improve their English skills.

In English Grammar, focus was on teaching basic concepts and principles in scientific analysis of the grammar of English and improving skills in reading expository writing accurately. In Introduction to English Linguistics, politeness and reference were the main topics taught. In Contrastive Expository Writing I, argumentative essay writing was taught.

◆研究計画

2008年度は、英語映画の日本語字幕を研究対象とし、原文であらわされているポライトネスが日本語字幕においてどのようにあらわされているか、それはどのような原則にしたがうのか、Nida (1964) の言うところの dynamic equivalence（受け手への効果という点での等価性）が保持されるのかを研究した。2009年度は、それを発展させ、日本語映画の原文と英語字幕におけるポライトネスの表現について研究する。2008年度の英語映画の日本語字幕の研究においてはデータが足りずに論じることができなかった、原文と字幕とでのポライトネスのあらわされ方の違いのどこまでが起点言語と着点言語のそれぞれの一般的な特性を反映するものであり、どこが字数に制約がある字幕翻訳の特性によるのかということについても、2009年度の研究においては検討する。